

横浜校舎学生スタッフ活動報告

2010年度、私たちボランティアセンター横浜学生スタッフは「地域と学生の架け橋になりたい!」「明学生にボランティアをより身近に感じてもらいたい!」という思いで、地域のイベントへの参加のほか、明学生にボランティアに一步踏み出してもらえるような様々な企画などを行ってきました。2008年12月から始めた「戸塚区民市」への参加、2009年から始めた登校しながらごみ拾いをする「どうせ登校するなら」、そして他大学との交流となった赤十字献血促進運動の「ボラフェスタ in KANAGAWA 2010」への参加などの活動をしました。それに加え、正規留学生のコミュニティ作りをする「アジアの“わ”」や、明学と地産地消システムで関わりを持つ大木農園で農作業を定期的にするようになり、とても充実した一年となりました。

【戸塚区民市への参加】

戸塚区民市は戸塚西口商店街が地域を盛り上げるために行っている朝市です。戸塚区役所駐車場で月に一度開催しています。私たちはこの区民市で物産品の販売や宣伝を手伝ってきましたが、前年度の区民市全体の反省としては区民市の宣伝が上手く出来ていないことや来客者の年齢層の片寄りなどが挙げられました。それを踏まえ、



私たちはボランティアチャレンジファンド賞でいただいた奨励金をもとに、季節に合わせた「アート企画」など子どもを対象とした学生主体の企画を始め、より区民市に幅広い年代の方を引き付けるような装飾に力をいれました。(区民市での活動についての詳細は72～73ページを参照)

この戸塚区民市で私たちはボランティアサークルと地域のパイプ役としても働きかけました。昨年に引き続き、明学ボランティアサークルからJUNKO Association、なんとかなるさ、あちょみだが、この区民市に参加をしてくれました。また今年度から新たに、Free♥Willが参加を始めました。さらに、一般学生が個人的に区民市に参加したいと言ってくれることもあり、さらに明学と地域の交流が深まってきたように思います。今年度の戸塚区民市での活動で子ども企画を行うことにより、幅広い年代の方に区民市を楽しんでいただけたことがわかりました。これは、より区民市を盛り上げるための大きな一歩になったと思います。課題は、やはり子どもの人数です。さらに多く子どもが来場してくれたら、より活気のある区民市になると思います。子どもを対象とした企画を続けることによって、子どもが大人を連れてくるような区民市を商店街の方たちと一緒に作りあげていきたいです。

【どうせ登校するなら】

「どうせ登校するなら」は2009年11月に始めた企画で、「環境」、「気軽さ」、「交流」をテーマとしています。朝8時頃に戸塚駅に集まり、そこから横浜キャンパスまでの通学路のゴミを拾って登校します。その名の通り、どうせ登校するなら何か戸塚地域に貢献しながら登校してもいいのではという発想からこの企画が始まりました。授業



の前に行く企画で、特別な持ち物も必要としないので、参加しやすいボランティアになっています。この企画には、毎回ゲストを呼ぶようにして、参加する学生がより楽しめるようにしました。例えば、今年度には、渋谷のパプティスト教会の牧師さんや、カリフォルニア大学の留学生がこの企画に参加してくれました。また、これは学生同士のネットワークも深まる活動もあり、他学科を越えて交流する光景が見られました。なかには、大学に興味を持たなかった学生が、この企画に参加することで、積極的に学校にくるようになったという学生がいることも耳にしました。

この企画により、地域の清掃に貢献できただけでなく、学生間のつながりやボランティアへの意識を高められたのではないかと思います。とても気軽に行なえるボランティアなので、ボランティア経験がない学生の初めの一歩目として、さらに多くの学生に参加してもらえようと思います。

【ボラフェスタ in KANAGAWA 2010 への参加】

赤十字神奈川支部が主催する「ボラフェスタ in KANAGAWA 2010」に参加しました。このイベントは年に一回、神奈川県内のボランティア活動を行っている大学生がボランティアを通して、献血促進を呼びかけるためのイベントで、私たち横浜学生スタッフは昨年度から参加しています。



今年度、私たちは来場者にキャップ集めと献血活動に興味を持ってもらおうと思い、「ボトルキャップアート」、「けんけつちゃんの貼り絵」、献血イメージソング「いのちのリズム」の手話歌、そして「活動紹介ポスター」を行いました。ボトルキャップアートでは約4000個のキャップを用いて、「地球」、ボラフェスタのメインテーマである「絆」の文字、そして「赤十字のマーク」を作りました。そして、キャップアートで使用したキャップと事前に各大学で集めたもの、当日会場で集めたものを合わせて、15万個を超えるキャップが集まりました。今回集められたキャップはワクチンに変えられ、発展途上国の子どもたちに届けられます。事前準備で色々大変な点もありましたが、結果的に多くキャップを集められ、良かったです。

また、終了後の反省点として、「大学間の交流ができていなかったこと」や「献血活動に関する活動があまりできていなかったこと」が挙げられたので、これらの反省点を活かして来年に活かしたいです。この活動を通して、世間の献血活動への理解が深まってくれば、と思います。

【2010 年度ボラセン☆通信】

今年のボラセン☆通信は4月と9月に春号・秋号を発行しました。

4月の春号では新入生向けに「ボランティアを通して新たな一歩を踏み出そう」というテーマを掲げ、まずはボランティアの魅力を知ってもらうために学生スタッフの意見を載せて読みやすい紙面にしました。9月の秋号は、「いろんな場所で出会う笑顔」というテーマで、春号よりも一歩踏み出せるように実際に参加しているボランティアを取り上げ、「戸塚区民市」「大木農園」「アジアの“わ”」を載せました。ボラセン学生スタッフではない人も一緒にボランティアをする機会が増え、誰でも気軽に、一緒にボランティアに参加できることが伝えられたと思います。



【大木農園】

大木農園は明治学院大学の近くにあり、大学と地産地消システムを結ぶ農園です。私たち学生スタッフは今年度から、月に一度この大木農園で農作業をさせていただきました。農業に興味を持つ学生も多く、一度参加してくれた学生の多くはリピーターとなり、「次はいつありますか」とボラセンを尋ねてくれます。大木農園の経営者の大木さんは殺虫剤を使わず、独自に開発したネットを使うことで、有機栽培を行なっていることから、学生が学べることはたくさんあります。大木さんと話す機会が増えたことから、今ではとても気軽にコンタクトをとれるようになりました。人数の多いときには、バーベキューを開いてくれることもありました。今後も大木農園での活動への参加を促したいと思います。



【アジアの“わ”～明学で異文化交流をしてみませんか？～】

この企画は、マレーシアからの留学生である学生スタッフが友人の日本人学生と協力し合い、今年度の春から始めたものです。正規留学生は日本語を流暢に話しているのも、また外見からすぐに留学生と分かるわけではありません。2010年度には全学で137人を超える留学生が学んでいることは、あまり知られていません。しかし、いくら日本語が上手だと言っても日本の大学での生活は困らないとは言えません。日常の会話はスムーズにできるものの、正規留学生がキャンパスに一人で見かけたり、留学生から「明治学院大学での勉強や同世代の日本人学生との文化の違いなどの悩みを相談できる人がおらず、学校からの正規留学生のための支援やイベントが少ないので、大学生活をあまり満喫できない」という声を耳にすることがありました。



そこで始めたのがこのアジアからの正規留学生が参加できるコミュニティ作りをする「アジアの“わ”」

です。お互いの国、文化、言葉などを分かりあうことで、留学生と日本人学生同士、また、留学生同士の接点を増やし、交流を深めてもらうことを目指しています。

初めての企画だったため、最初、イベントに人が集まるかどうかをすごく心配していましたが、初日の活動には15人ほどの留学生、日本人学生80人以上もの参加者が集まってくれて、アジアに関心を持っている学生がたくさんいることがわかり、この企画を立ち上げてよかったと思いました。春学期から週一回昼休みにご飯を食べながらの留学生による出身国の紹介、アジアの文化の違いについてグループディスカッションや食事会をしました。春と秋を含め、17回イベントを企画しました。同じアジアでも違う文化や習慣を紹介しました。

そのほか、アジア各国の料理を食べながら正規留学生と日本人学生の親睦を深めるために、7月に横浜校舎ブラウン館でアジアの“わ”の食事会を開きました。留学生、教職員を含む約75名が集まり、楽しい時間を過ごしました。参加した留学生やベトナム、ミャンマーの教育支援をしているJUNKO Association、学生スタッフ、先生がそれぞれ得意料理を披露し、韓国や中国、タイ、マレーシア、ベトナム、日本の料理が会場に並びました。「台湾が好きな人と出会えた」（台湾からの交換留学生）、「新しい留学生と知り合いになれた」（国際学部の日本人学生）などの声を頂きました。初めての試みで上手くいかないこともありましたが、この食事会がねらいとした国際交流が実現できたと思います。参加者の方からの喜びの声を聞いて企画への達成感を感じられました。

11月実施の鎌倉ハイキングでは国際学部のヴィッシー先生が鎌倉を案内してくれました。オリジナルのハイキングコースを歩き、学生に日本の歴史についていろいろと教えてくれました。日本人の参加者はアメリカ人である先生に日本史を教わるのは不思議な感覚でした。「この鎌倉散策を通して、もっと自分の国の歴史について知りたくなった」という声を頂きました。

12月には各国のアジアの料理が楽しめるクリスマス食事会を企画しました。学生サークルのゴスペル・クワイアと白金ベルハーモニーリングーズに演奏してもらいました。素敵な演奏を聴きながら、料理がさらに美味しくなりました。加えて今回は留学生、日本学生のほかに、多くの先生方の参加も得られ盛況でした。「普段は関わらない日本人学生や留学生と話せて楽しかった」などの声を頂きました。

毎回たくさんの学生に参加してもらい、みんなで楽しいひとときを過ごすことができました。はじめはうまく交流できなかった学生たちも回を重ねるごとに仲良くなり、アジアの“わ”が広がっていく様子が見えてきました。毎回楽しんでもらえるような企画を考え工夫するのは大変でしたが、「参加者からは留学生の友だちが出来た」、「いろんな国の文化を知れて良かった」など、楽しかったという声を多くもらいました。このようなアジアの“わ”は、私たち正規留学生と日本人学生の距離を縮め、コミュニティをつくります。今後もたくさんの企画を作り、大切にしていきたいです。

学生スタッフスケジュール

アジアの“わ”スケジュール

<p>3月：合宿</p> <p>4月：桜祭り、ボラ通春号発行、大木農園 どうせ登校するなら（2回）</p> <p>5月：新入生勧誘、戸塚まつり、大木農園</p> <p>7月：小田急夏祭り、どうせ登校するなら</p> <p>8月：納涼祭</p> <p>9月：ボラ通秋号発行、大木農園</p> <p>10月：どうせ登校するなら（2回） 防災紙芝居</p> <p>11月：ボラフェタ in KANAGAWA 2010 どうせ登校するなら</p> <p>12月：どうせ登校するなら、大木農園</p> <p>※ 8、9月以外の月は戸塚区民市へ参加</p>	<p>[春学期]交流テーマ</p> <p>5/13 活動や留学生紹介</p> <p>5/20 アジア人が住みやすい都市</p> <p>5/27 カルチャーショック</p> <p>6/3 中国</p> <p>6/10 台湾</p>	<p>6/17 韓国</p> <p>6/24 マレーシア</p> <p>7/8 終了式</p> <p><イベントの開催></p> <p>7/1 食事会</p> <p>韓国語教室</p>
	<p>[秋学期]交流テーマ</p> <p>10/25 すごろく</p> <p>11/8 愛の囁き</p> <p>11/15 国際恋愛</p> <p>11/22 Free Talk</p> <p>11/29 伝統的な衣装の紹介</p>	<p>12/6 お正月</p> <p>12/13 クリスマスの過ごし方</p> <p>12/20 食事(クリスマス)会</p> <p><イベントの開催></p> <p>11/5~15 写真展</p> <p>11/28 鎌倉ハイキング</p>

2010年度は、地域密着型から国際ボランティアまで取り組んだため、とても忙しく充実した一年になりました。そこから学ぶことはたくさんありました。なかでも、長く参加を続けている戸塚区民市や大木農園では、企画を行う上での「信頼」の大切さを知りました。互いに顔や性格を知り信頼感があると、企画作りもとても円滑にいき、ときにはその企画作りに気軽に協力を求められます。このように、企画を行う際には互いに信頼感を持つことでより良いものが生まれるということを学びました。来年主体となる学生スタッフは、子どもと接するボランティアに興味のある人が多いので、新たな企画が生まれることが期待できると思います。

(横浜学生スタッフチーフ：国際学科2年日高大樹、

サブチーフ：国際経営学科2年小邑正史、国際学科2年庄克強)

小田急分譲地の地域活動への関わり～「小田急コスモス」の活動

2008年1月以降、学生グループ「あったかサークルひまわり」が横浜キャンパス北門近くの小田急分譲地自治会の地域活動に参加して、地域交流を深めてきた。2010年3月に「ひまわり」のコアメンバーが卒業したのに伴い「ひまわり」は解散し、活動を引き継いだ学生たちが「小田急コスモス」を組織して、ボランティアセンターと協働しながら活動している。今年度はこれまで通り、地域活動としてサロンすみれ（茶話会）、しあわせの会（高齢者のデイサービス）、自治会のお祭りに参加してきた。上級生が在籍校地の変更や授業のために思うような参加が難しいなか、1年生が空き時間をフル活用して熱心に活動に取り組んでいた。また7月の夏祭りにはコスモスメンバーに加えて、友人、留学生を含め13人の学生が参加して、住民の方が出店するかき氷や焼きそば等の屋台の手伝いを通して、地域との交流をおこなった。

今年度は民生委員・児童委員会会長から「高齢者の活動だけでなく、子ども向けての活動に取り組んでくれないか」という依頼がきっかけとなり、子ども会とのコラボが進んだ。子どもを対象としたボランティアサークルで経験を積んだ学生が子ども会の会長と相談しながら準備を進めて、夏休み中の8月に子どもたちの遊びの活動を実施した。夏の猛暑のなかパンダの格好をした学生は、スイカ割りやドッチボール、スーパーボールすくいなど、子どもたちが喜ぶたくさんの遊びを用意し、学生と子ども交流は大変盛り上がった。保護者から「学生はよく練った企画を準備していて、安心して見ていられる」「違う学年の子どもと遊ぶ機会がこれまでになかったので、よい経験をさせてもらった」と好評であった。準備を進めた中心的な学生は「自分たちで企画して、子どもたちと思いっきり遊ぶ活動を作ることが夢だった。とても達成感があったので、またぜひやりたい」と、子ども会と学生の初コラボ活動は大成功であった。

秋学期には「私たちがお世話してもらっているような雰囲気を変えたいので、しあわせの会の方に喜んでもらえることが何かしたい」という思いのもと、地域の方に親しんでもらえる曲を選曲しながらリコーダー演奏をした。演奏をきっかけに話が進むなど、学生とデイサービスに参加する方々との交流が進んでいた。

12月には「小田急コスモス」の活動内容と性格を明確にするための話し合いがコーディネーターとの間でもたれ、今後は高齢者、お祭り、子どもという3本柱を据え、更に公園清掃にも参加して、地域づくりに多面的に関わっていくこととなった。

今年度、新しく活動を引き継いだ「コスモス」学生は遠慮してしまって、地域の方に話しかけられないなど、思うように交流できないこともあるという。地域と学生の交流の試行錯誤のなかで進んでいるが、そうした手探りのなかにこそ学びのプロセスがあることを留意しつつ、学生と地域の思いがつながるよう、根気よく活動を支援していきたい。

(市川)

「戸塚区民市」を拠点とした地域と学生の協働の進展

戸塚区民市は再開発で揺れる戸塚駅西口地域において地域の活性化と人々の交流をねらいとして、商店街が中心となり立ち上げた青空市である。ボランティアセンター横浜学生スタッフと国際協力サークル（あちょみだ、JUNKO Association、なんとかなるさ）は、2008年12月より参加している。横浜学生スタッフは区民市に出店する商店の販売の手伝いやステージイベントの企画に取り組み、国際協力サークルは学生が支援するベトナムやタイの村等で入手した雑貨を戸塚区民市で販売し、その売り上げをベトナムの子どもたちやタイ北部の山岳民族の支援に役立ててきた。

今年度の戸塚区民市は2010年4月に戸塚駅西口の再開発ビルがオープンして、駅前地域が様変わりしたなかで行われた。横浜学生スタッフは戸塚地域の歴史を多くの人に知ってもらいたいと考え、会場に隣接する戸塚小学校の壁面に「戸塚今昔写真展～歴史ある戸塚、変わりゆく戸塚」を展示したり、地域の環境団体桜セーバーの協力を得て、竹トンボの製作教室等を展開した。学生スタッフ企画の定着と充実化が今年度のセンターにとって課題であったが、6月に横浜学生スタッフが「Do for とつか」という企画でボランティアファンド学生チャレンジ賞に応募したところ、助成を受けられることとなり、その活動として毎月子ども広場やアート活動などの企画を展開した。（横浜学生スタッフの取り組みは本書57～61ページに、「Do for とつか」の取り組みは、本書72～73ページに記載している。）

2011年1月現在で実施回数は26回に及び、学生と区民市に訪れるお客さんとの交流は盛り上がってきた。区民市に毎回訪れているお祖母さんと小学生のお孫さんは、アジア雑貨を購入することが、途上国支援として役立つことを知り、学生が取り扱うタイやベトナムの商品を購入し学生の活動を応援してくれている。区民市の来場者にとってフェアトレードは必ずしも身近ではない場合もあるが、学生による紹介がきっかけとなって、フェアトレードに関心を持ってくれるお客さんが増えるなど、学生が取り組む国際協力活動が地域にも浸透してきていることが伺える。

再開発ビルのオープンから1年近くが経過する2011年2月に向けて、西口商店街と再開発ビルが協力して雪まつりイベントを開催するという計画が生まれている。分断された地域内が協力し合いまちづくりに取り組む機運が生まれてきていたことは、戸塚区民市を拠点として協力関係を盛り上げてきた成果と考えられる。一方、商店街と学生が協力するプロセスにおいては、すべてが順調に進んだとはいえず、協働の難しさを感じたことがあった。しかし、商店街との連絡・調整にあたった学生は「辛抱強く一つひとつ問題を乗り越えながら活動を続けていく大切さが戸塚区民市での活動を通して分かってきた」「地域と活動をする上で、信頼関係を築くことがなによりも大切だと理解した」と振り返るように、問題を乗り越えるプロセスのなかにこそ、学びがあるということも、筆者も学生も学んでいる。今後も一つひとつのステップを踏んで進めていくことが大切なことと捉え、戸塚区民市が拠点となり地域と学生の協働が進むように取り組んでいきたい。

（市川）

大木農園での農作業の取り組み

本学横浜キャンパスでは2009年度よりエコキャンパス化を進め、その取り組みの一つとして地元戸塚の有機農家「大木農園」と連携した循環型「地産地消」を同年11月より推進している。横浜キャンパス内の生協食堂では大木農園の野菜を材料にした料理が提供され、食堂の野菜屑やキャンパスの落ち葉を大木農園が堆肥にして活用するという循環システムが動いている。こうした大学と大木農園のつながりを受けて、2010年2月よりボランティアセンターの呼びかけで学生が農作業の手伝いに行くようになった。学生の農業への関心は高く、今年60名を超える学生が大木農園に訪れて農作業に携わった。農園では年間で約58種類の野菜を育てており、学生はじゃがいもの収穫や玉ねぎの苗の藁敷き、いちごの苗をビニールで保護する作業、草取りなど、季節に応じてさまざまな作業に取り組んだ（活動の様子は、ボランティアセンターのHPで紹介している）。どの作業も根気がいるものばかりで、大勢の学生が終日作業をして、やっと予定された範囲が終えられるような野菜づくりの苦労を学生は体験している一方、「成果が目に見えるので、農作業は達成感がある」と言って楽しんでた。また農業を通じて社会や仕事について理解を深める場面があった。農業は自然に関わっているので競争社会から遠いと感じていた学生がいたが、日本のTPP参加などの社会の変化から影響を受けやすく不安を抱えている農家が多いこと、実家が農家の学生にとっては、これまで積極的に関わってこなかった農業ではあったが、自分の人生と両親が営む農業の関係を見つめ直している場面もあった。作業の後には、大木さんを囲んでバーベキューをして、人生や夢について語り合う場面があり、農園での学びは広がっている。

学生とセンターが媒介して、大木農園の有機農業や地域連携の仕組みを海外に発信するというエピソードがあった。横浜学生スタッフが、横浜に本部がある国際機関「アジア太平洋都市間協力ネットワーク(CITYNET)」に、大木農園と本学の循環型「地産地消」について紹介したところ、CITYNETが関心を示し、10月に横浜で開催された国際会議「Post-AWAREE Project（環境保護社会の達成による地球温暖化防止への取組）」で、大木氏が発表者として招かれ、防虫ネットを使用した有機野菜作り、学校等との身近な地域社会との協働することで、安定した農業生産の環境づくりをしている話をした。大木農園の学内での関心は高く、教職員から「大木農園に行ってみよう」という声を聞くことも多い。今後は学生参加を促すだけでなく、教職員が気軽に大木農園に関わってもらえるような呼びかけを積極的にしていきたい。

地域密着型プログラム「とつかプロジェクト」への支援

学生の戸塚地域への関わりを促進し、地域福祉の推進を担う学生を育成する「とつかプロジェクト」（横浜市戸塚区社会福祉協議会主催、とつか区民活動センター、明治学院大学ボランティアセンター協力）に本ボランティアセンターは、学生募集やオリエンテーションや振り返りのワークショップの講師、プログラム企画に関するアイデアの提供などで関わった。このプログラムは戸塚区在住・在学の学生

を対象としていたが、今年度は本センターから紹介を受けた本学の学生15名のみが参加した。

プログラムの導入として参加学生は7月上旬に「お見合い会」(受け入れ団体と学生の顔合わせ)と、8月上旬にオリエンテーション(地域課題や学生と地域の協働の実態と課題について学び、活動目標を立てる)で事前学習に取り組んだ。8月、9月には戸塚区社会福祉協議会(福祉)、上倉田地域ケアプラザ(福祉)、ドリームハイツ地域運営協議会(まちづくり)、大木農園(環境)の4団体から1団体を選択し、7日~10日間のフィールドワークをおこなった。8月末には学生は「善了寺」(共生文化の発信地)や「舞岡公園」(市民運営の公園)等、戸塚地域の5つの現場に訪れ、多様なアクターが地域づくりに取り組んでいることを学んだ後に、フィールドワークの中間報告をした。11月には活動の成果と学びを発表し、さらに今後の地域と学生の協働の可能性を考えるための報告会を実施した。第一部では、受け入れ団体ごとに、それぞれどのような地域のニーズに応えながら活動を展開しているか、工夫や苦勞などを紹介したあとに、一人ひとりの学生が活動から得た学びを発表した。例えば、上倉田地域ケアプラザで活動した学生は、当初は障がい児とうまく関係が作れず苦勞したが、ケアプラザのスタッフの助言のもと辛抱強く子どもと向き合った結果、次第に子どもたちの目標となるようなお兄さんとして活躍できるようになったこと、子どもに関わる際にはどんなときも子どもと真剣に向き合うことが大切であると学んだ、と報告した。ドリームハイツで活動した学生は、ハイツでは住民が地域での暮らしやすさとニーズに応じて配食サービスやコミュニティカフェなどの活動を作り、住みやすいまちづくりに取り組んできたこと、10年後にはハイツの高齢化率が50%を超えるが、異世代交流をするなどの工夫をし、地域内で協力しながら来るべき課題を乗り越えようとしている姿にとっても感動した、と話をしていた。第2部は学生が主体となって準備して地域と学生の懇親会とおこなった。軽食を食べながら和やかな雰囲気の中、とつかプロジェクトの思い出や今後の展開について話をしていた。学生は自主活動として10月にドリームハイツ内のサロンで携帯電話講座を開催したり、多くの学生が大木農園を知り、関われるように農園を紹介するリーフレットを作るなど、学生の地域参加がそれぞれ事後にも進んでいた。「とつかプロジェクトを大学内で広めたい」という学生と地域の要望のもと、2011年1月に大学内での小規模の報告会を開催した。テスト前の時期で来場者は多くはなかったが、戸塚地域の様子と学生の関わりを学内に広める貴重な機会となった。

プログラム参加者や活動に関わった地域関係者から「とつかプロジェクト」の継続と発展の声が多いことから、今後は戸塚区社会福祉協議会、とつか区民活動センター、明治学院大学ボランティアセンターが協働して、取り組むこととなった。本センターとしては学生の地域参加(サービス)と活動を通じた学び(ラーニング)が深められるよう、さらにプログラムの充実化をはかっていきたい。

(市川)

横浜市立倉田小学校への訪問授業

ボランティアセンターでは、センター開設以来、横浜校舎正門近くの倉田小学校と交流がおこなわれている。昨年度は小学校からの依頼により「手話サークルぼけ」が、小学校の校歌に手話の振りをつけて、手話歌を教えるという取り組みがあった。今年度はカンボジアの教育支援に取り組む学生サークル「ぼけっと」が「小学生とカンボジアの子どもたちをつなぐ活動をしたい」とセンターに訪れたことがきっかけとなり、交流活動が動き出した。5月に筆者と学生で倉田小学校に訪問して相談したところ、校長先生、教頭先生が熱心に対応して下さり、交流のねらいや計画について具体的な協議が進んだ。カンボジアに関するだけでなく、日常活動にも関わってほしいという小学校の依頼を受けて、学生は5月から田んぼの代かきや田植えの作業などに取り組んだ後に、10月からカンボジアについての連続授業を行った。子どもたちはその学習成果を11月の発表会「倉田秋祭り」で披露した。（「ぼけっと」による活動は、本書78～79ページに記載）

こうして倉田小学校と明学生が連携しておこなう倉田小学校での授業は、今年度大きく進展し、1月には中国で砂漠緑化に取り組む学生が生物多様性や国際協力をテーマに出張授業したり、2月には横浜学生スタッフの主催で5年生全員の約90名が横浜キャンパスに訪れ、大学生との交流を通して進路を考える交流企画の準備が進んでいる。学生にとっては、子どもたちに伝える過程で自らの活動を見つめ直すという効果が生まれている。今後もセンター、学生、近隣小学校の協力関係を進展させていきたい。

地域作業所「パン工房 Ange」とのコラボレーション

今年度は昨年からの学生と Ange の協力関係を基盤にして、学生サークル「あちょみだ」や「なんとかなるさ」との交流が進んだ。Angeがおこなうオープンカフェでは、上述の2つのサークルがアジア雑貨を販売したり、「なんとかなるさ」が提供するフェアトレード商品の Ange の店頭での常設販売が今年度6月からスタートした（詳しくは74～75ページに記載）。さらに、横浜キャンパス内9号館でのパン販売に関しては、学生がローテーションを組んで関わるなど、Angeと明学生の交流が学内に浸透していることが伺えた。

学生は活動を通して、フェアトレードの意義を地域の方にどのように伝えたら理解していただいているのか、Angeのスタッフの方との会話や助言のなかから、学びとっていた。Angeにとっては「ワークサポートセンターの役割は、発達障がいのある方が社会で働く力を身につけることであるので、学生との交流により通所者のコミュニケーション力が高まり、社会への関心が広がっている」とコメントをいただいた。最近では学生から倉田小学校の子どもたちに、Angeのことを伝えたいという提案があるなど、学生との交流がきっかけとなり、Angeの地域との関わりが進展している。こうして、大学と Ange は協力関係のなかから地域に開かれた場として変化させることができたと考える。今後も双方が協力し合うことで、学生の多様な育ちを支える場として、機能するよう取り組みたい。 (市川)

2010 年度を振り返って

横浜ボランティアセンターは、新入生が在籍する横浜キャンパスの特徴から、学生が本学の教育理念“Do for others”への理解を深めるための導入活動の充実化を図っている。学生が地域社会の多様性と地域貢献の可能性への理解を深められるよう、これまで協働してきた戸塚区民市や柏尾川魅力づくりフォーラム、小田急分譲地自治会の活動に加えて、横浜キャンパスと連携して循環型「地産地消」を進めている大木農園での農作業の手伝い、及び倉田小学校への訪問授業などの、新たな活動に取り組んだ。こうして広がったセンターと戸塚地域の活動地図は【図1】として示した。ボランティア募集団体による説明会では、今年度学生の活動実績がある団体を重点的に大学に招き、活動先に参加経験のある学生が体験談を話すという工夫をおこなった。昨年度までは説明会に参加した学生をどのように実際の活動参加に結びつけるかということが課題であったが、実際に学生から話を聞くことでやりたい気持ちが強くなったとの声があり、説明会で学生が発信することで新たな学生の参加が進むことが確認された。今年度からスタートした「ボラセン☆トーク Day」(昼休みにボランティアをテーマに交流)では、大木農園での活動を開拓した学生、中国の砂漠緑化活動に取り組む学生から活動への思いや魅力についての話、原田センター長や浅川センター補佐からは国際協力 NGO の役割の広がりや豊かな高齢期のための行政による支援の取り組みなど、専門の立場から講演があった。トーク Day は多様な立場からの経験を直接聞けると好評であった。

学生スタッフは、地域と学生の架け橋として、学生にボランティアを広めるための様々な企画を立てながら取り組んでいる。(詳しくは 57～61 ページを参照)今年度は戸塚区民市の活性化を目指す「Do for とつか」(詳しくは 72～73 ページを参照)や登校時のゴミ拾い「どうせ登校するなら」など、学生が気軽に参加できるような活動がたくさん生まれた。さらにマレーシア出身の留学生の学生スタッフの問題意識がもととなり、アジアからの正規留学生と日本人学生の交流と相互支援の関係づくりに取り組んだ。留学生から「アジアの“わ”に参加してから、友だちが増えて大学生生活に充実感を感じられるようになった」、「大学内での留学生の存在を知ってもらえる機会が増えた」という声が多いことから、学生スタッフが留学生支援に取り組む意義が確認された。また「アジアの“わ”」が進むに連れて、留学生のセンターへの訪問や地域のお祭りに参加する機会が増え、留学生が“Do for others”の精神について理解を深め、活動に関わる機会が増えたと言える。

このようなセンターとの関わりを通して、学生はさまざまな立場にある人、社会との具体的な関わりを展開させ、学生の活動が新たな活動のはじまりへと発展するという循環が生まれている。例えば、カンボジアを支援学生サークル「ぼけっと」の倉田小学校での訪問授業が好評だったことから、その後、小学校からの依頼で学生がおこなう砂漠緑化活動の授業や学生スタッフが主催する倉田小学校との交流プログラムが生まれた。「とつかプロジェクト」での学生のはたらきが評判になり、子育て支援施設「とっ

との芽」や「上倉田地域ケアプラザ」からセンターに依頼があり、管弦楽部が訪問演奏に行くなどがあった。こうして学生はセンターから活動を提供されるだけでなく、学生自身がつながりや新たな活動を生す、協働の作り手として成長している。

これまで、学生による地域社会への貢献をどのように図るか、その導入部への支援について述べてきたが、さらにセンターが関わって生まれた活動の新たな企画の立ち上げや充実化の支援も行っている。横浜学生スタッフや学生サークル「ぼけっと」、「なんとかなるさ」が地域との協働企画を進めるにあたっては、コーディネーターが相談に応じたり助言した結果、「ボランティアファンド学生チャレンジ賞」の応募・助成へと発展した。また外国につながる子どもたちの学習支援と交流に取り組む「こ・こ・ろ」は、コーディネーターとの話し合いから進学支援というテーマが明確になり、「ソニーマーケティング学生ボランティアファンド」への応募・助成へとなった。タイの山岳民族を支援する「あちょみだ」は、センターが助成金申請のサポートをしたところ、タイの少女たちへの保健衛生活動や人身売買防止プロジェクト企画で、「(財) 学生サポートセンター」、「横浜 YMCA 夢すくすく賞」から助成金が授与され、活動の更なる充実化が図られた。

今年度の取り組みを通して、センターは活動支援だけでなく、活動から得られる学びの充実化に対する働きかけの必要性を感じている。取り組みは当初目指したように進んでいるか、活動の成果や課題はどういったところにあるかなど、活動に携わる学生や地域関係者とともに振り返り整理したいという課題意識が学生やコーディネーターのなかで生まれている。今年度は Ange や倉田小学校との連携では、プログラム評価の手法を取り入れ、活動の当事者である学生や地域関係者が活動のゴール設定や結果や成果について話し合うことで、活動の目標や計画についてコンセンサスづくりを試みた。こうした振り返り活動は着手したばかりであるが、今後は実践面だけでなく、活動からどう学ぶかという評価手法も高めていきたい。「とつかプロジェクト」の参加学生からは、「ドリームハイツで問題意識を深めた支援のあり方について自分が専門とする心理の分野で掘り下げたいが、どのように学科での勉強に結び付けていったらいいのか分からない」「福祉のまちづくりに興味を持ったので、政治の分野で深めたい」など、地域社会での活動を通して育った問題意識をどのように大学での学びへと発展させていくかという課題も明らかになった。今後は、センターと学部、教員との効果的な連携方法、学生の地域社会での経験が学びへと昇華されるような方策を探っていきたいと考えている。(市川)

【図1】 横浜キャンパス近隣コラボ Map (横浜市戸塚区)

- ① 柏尾川魅力づくりフォーラム
- ② 戸塚区民市
- ③ どうせ登校するなら
- ④ 地域作業所 Ange
- ⑤ 小田急コスモス

